

保育における人形劇の史的検討 II

— 内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動 —

齊藤尚子

(平成元年9月30日受理)

A Historical Review of the Puppet Play in Kindergarten II — The Foundation of the Puppet Theater and the Spread of Puppets by Kensho Uchiyama —

Naoko SAITO

(Received September 30, 1989)

はじめに

本研究の目的は、保育における人形劇が、いつ頃、誰によって導入され、どのように普及していったのかを明らかにすることである。前報¹⁾では、我国の人形劇の歴史をふまえた上で、保育に初めて人形劇を導入したのは東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事・倉橋惣三であったことを報告した。それは、彼が幼い頃から人形劇に親しみ、人形劇が好きであったことに加え、2年余りの文部省在外研究員として訪問した欧米各国で出会った多くの人形劇に影響されたことだった。帰国後の大正12年より、附属幼稚園の保姆たちと共に「お茶の水人形座」と称して園児たちに見せるようになったのが始まりである。附属幼稚園の保姆たちが脚本を書いたり、講習会の講師を勉めたりして、人形劇もしいに幼稚園・保育所に広がっていくが、ちょうどそれは「新興人形劇」と呼ばれ、浄瑠璃ではない新しい人形劇団が次々と誕生したのと時を同じくしていた。

今回は、倉橋惣三よりはやや遅れたものの関東大震災直後の大正13年より東京・芝の増上寺託児所の主事として保育に関わり、人形劇の普及に活躍をした内山憲尚(1899~1979)について、文献的調査、検討を行なったことを報告する。

1. 内山憲尚と人形劇

まずは、内山の生いたちと人形劇を始めるまでの背景について述べることにしたい。

彼は、明治32年1月3日大阪に生まれ、誕生日の数字をとって「一三夫」と父に名付けられた。父憲政は「大児童学科・保育科

日本紡績の福島工場の人事部長で律儀な古武士を思わせる正義感の強い人」であり、母定江は「真宗大谷派の寺院の娘で良妻型の人」²⁾であったという。また、母は高等小学校の教員を三十数年やっていたそうで、その為に弟が生まれると共に愛媛県吉田町の祖父母の許に預けられ、小学校の1年から3年までを過ごしている。

倉橋同様に彼も子どもの頃に人形劇に出会うわけだが、それはこの吉田町にいた時で、祖父に影響されたことだった。祖父は浄瑠璃が大好きで、彼を伴なって遠くても出かけたという。当時は、農閑期になると淡路島から人形浄瑠璃の一座が地方巡業にきて、小屋掛けをし、公演を行っていた。「伊予路へは六之丞一座が来」³⁾と記しているが、宇野小四郎氏の「現代に生きる伝統人形芝居」⁴⁾の中に「市村六之丞座」というのがあった。それによると

元は市村にあった。享保時代(1726~1735)からの名門。ここも一時阿波に渡っていたものを買い戻したものである。かつては東京方面まで巡演した有力な座であった。

現在は一切の人形、道具が眠っている。

となっている。「文楽」の始まりとされる植村文楽も淡路島出身であり、淡路島は古くから芸能集団が存続していたらしく、「地方人形芝居集団の大きな拠点の一つ」⁵⁾であった。現在でも淡路人形座は公演を続けており、徳島や内山一三夫がいた愛媛にもいくつかの座が存続している。

小学生だった彼も、祖父に連れられて見ていくうちにだんだんと興味を持つようになった。祖父と共に大阪に戻ると、今度は御霊神社の境内にあった文楽座につれていかれた。「子ども心に、摂津大塚の豪快な語り口に血

をわかせ、呂升の美声に魅せられ、土佐大夫の連綿たる語り口に涙を流し、文五郎の人形の動きに感動したのである⁶⁾と、当時のことを述べている。

御霊神社にあったという文楽座は、明治5年より大阪松島にあった文楽座が、明治21年に新しく結成された「彦六座」に対抗するため、都心の御霊神社に新築したのが始まりである。彦六座と文楽座はお互いに競い合うが、明治26年に彦六座は火災に会い、「稲荷座」と改める。が、31年に閉場してしまった。映画もなかった当時は、庶民の娯楽として人形芝居が盛んに興行されていたのである。明治42年には、松竹が植村家より文楽座を引き継ぎ、大正15年11月29日全焼してしまうまで、御霊神社で興業されていたのである⁷⁾。

内山は上京した後も「大阪文楽座の引越し公演には必ず出かけ、また女学生を引参観させたりした⁸⁾」と記している。この辺は、結城孫三郎一座を東京女子高等師範学校の講堂に呼んで演じさせた倉橋惣三とよく似ている。

吉田町にいた頃、近所に教会ができて日曜学校に通うようになるが、大阪に帰ってきてからも教会の日曜学校に通っている。小学校5年生の時、江戸堀教会で巖谷小波と久留島武彦のお伽話を聞き、そのことが後に童話に興味を持つきっかけとなった。

中学校は浄土宗の上宮中学校に入学、剣道を熱心していた。また父が「恕堂」という号で俳句を作っていたのに影響を受けて、彼も川柳を作り始める。最初剣道をやっていたことから、号を「剣堂」としたが、父の名前から憲をとって「憲堂」としたという。これがその後ペンネームとなった。内山は生涯において百冊あまりの本を出版するが、最初の単行本は川柳の本で大正12年の「川柳武玉川」である。

昭和16年に得度して僧籍に入り、仕事の上でも戸籍の上でも「憲尚」に改めた。

中学を卒業すると、父と同じ会社に就職するが、事務の仕事に満足できず、大正9年9月に上京し社会政策学院に入学、12月に大阪へもどった。その大晦日の晩は、社会探訪の目的で大阪釜ヶ崎の木賃宿に泊るが、正月を迎えるにも餅の買えない父子の会話を聞き、「自分はこんな子どものために働かせて貰おうと決心した⁹⁾」のであった。

年が明けて、釜ヶ崎に浄土宗四恩学園ができることを聞き、彼はボランティアとしてその学園へ泊り込み、不

就学児童の夜学と子ども会の指導にあたった。夜学に来る子どもたちは、「昼間マッチ工場とかモク拾いとか、何か金儲けのために働かされている¹⁰⁾」子どもであった。また、同学園の理事であった長谷川順孝に童話の手ほどきを受け、浄土宗大阪お伽団で修業¹¹⁾さらに仏教修養会に出席するなど仏教信仰を深めることになったのである。

四恩学園では子どもたちと共に1年間を過ごす、子どもの教育には、教育者としての専門知識が必要であることを感じ、大学に入学するため上京したのであった。

大正11年4月、23歳で東洋大学社会事業科に入学。当時は仏教の日曜学校が盛んに行なわれていて、上京と同時に彼は増上寺の日曜学校を毎日曜日に手伝った。子どもの頃に通っていた教会での日曜学校の体験が大いに参考になったと述べている。

また同年5月に結成された日本童話協会の会員となり、巖谷小波をはじめ、久留島武彦、岸辺福雄の口演童話を学んだ。童話学については協会長の芦谷重常に師事し、彼の「こども新聞」の編集も手伝っている。さらに小川未明の高円寺の自宅にも通い学んだ。

日本童話協会の機関誌「童話研究」の第一号は、大正11年7月に発行され、内山憲堂の名前が初出するのは同年9月発行の第2号である。童話研究創刊記念の懇話会の記事の中に、出席者名簿に彼の名前がある¹²⁾。彼の文章が載るのは第3号で、「童話会消息」覧に東洋大学児童研究会のことを紹介したものである¹³⁾。第2巻5号には「兎の身代り」という童話¹⁴⁾を書いており、当初より「童話研究」に深く関わっていたことがわかる。

大正12年9月1日関東大震災に会い、一度大阪へ帰るが、再び12月に上京。増上寺では多くの罹災者を収容して救済にあたっていた。増上寺社会部では、周辺のバラックの子どもたちのために、境内の浄土教校の教室で「増上寺託児所」を開くことになり、翌13年より内山憲堂を主事として保育が開始された。やがて宮内省払下げの古材木によって独立園舎が建てられ、彼はそこに住み込んだ。「童話研究」にも、彼の住所は「芝区芝公園14号地」と訂正が出されている¹⁵⁾。

翌14年4月から増上寺託児所は、明德幼稚園(最初は明德学園幼稚園)に改められ、彼は引き続き主事となった。

人形劇を園児たちに見せるようになったのは、この頃からである。

昭和8年8月に出版した「指遣人形劇の製作と演出」

の中に、

「大正十三年著者が増上寺の幼稚園をお預りしてゐた頃、毎土曜日は小さい舞臺を持ち出して紙芝居をやったり玩具を並べてお話をしたりしてゐたが、支那のギニョールの一個を手に入れた時に、今後の幼児のための新藝術はこれではなければならないと痛感した。その後、街頭に玩具屋の店頭にギニョールを尋ねて、買ひ得た数個のものを組み合わせて脚本を作ったのである。一略一

それ以後農民美術のものを手に入れて人形の數も十數個を數へ脚本も「お茶碗ポックリコ」「貧乏神となまけ者」等數種を作って時々幼児のために公演をした」¹⁶⁾

と記している。また昭和39年に書かれた著書には、「人形劇が保育に取り上げられるようになったのは大正13年頃で、当時、私は芝の明德幼稚園で保育に従事していたが、中国製の指遣人形と紙粘土の自作の人形で園児たちに保育室で見せてやった」¹⁷⁾と述べている。以上のことから保育の仕事について当初より、人形劇を保育に導入していたことがわかった。

昭和7年に出版された「子供のための人形劇脚本」¹⁸⁾を見ると、1、2名で演じられる脚本ばかりで、2名でとなっている脚本も工夫すれば一人で演じられると説明されている。またこの本には、内山自身が人形を両手にはめて園児に見せている写真や、家庭で子どもに見せている写真が掲載されているが、いずれも背景などは使わず、舞台の中に隠れないで、上半身を見せたまま演じている様子が写真となっている。以上のことから、倉橋が幼稚園の保姆と共に演じていたのに対して、内山の場合保育室においては、ほとんど一人で演じていたのではないかと推察された。大正12年倉橋惣三41歳、大正13年内山憲堂25歳の時であった。

では、なぜ保育に人形劇を導入したのかという点についてであるが、これまで調べてきた中には明確に記されたものがなく、理由を上げるとするならば、幼児の芸術教育としてとらえたことと、倉橋同様、彼自身が人形劇が好きであったということが考えられる。

幼児に芸術教育が必要であるという考え方は、彼が昭和9年に始めた幼稚園の名前に、「聖美」とつけた中にも込められている。彼は幼稚園の名前をつける時、幼児教育の目標を名前につけることにし、「聖美幼稚園」とした。「聖」は宗教教育を、「美」は芸術教育を表わしているという。¹⁹⁾

また、人形劇は総合芸術であり、「子供のための人形

劇はどこまでも詩的正義に立脚した全人教育でなければならない」と述べている。そして人形劇は、童話の立体化であり、想像力を高め（真の教育）、同情心を養成し（善の教育）、芸術教育（美の教育）であると記している。²⁰⁾

2. 子供の人形座

昭和2年に明德幼稚園を辞め、東洋家政女学校の校長岸辺福雄より声をかけられて、教師の免許を取るため東洋大学文学部の二部に籍をおいた。昭和3年の1月から同女学校で教えるようになるが、週に1回は東洋幼稚園児に童話を話している。

やがて新興人形劇運動が盛んになり、保育においても倉橋が人形劇普及に力を入れるようになって、フレール館から脚本、人形、舞台が売り出された。このように人形劇が広がりを見せてきた中で、内山は昭和5年11月「東京人形劇研究所」を設立し、翌6年秋には24名²¹⁾の仲間と「子供の人形座」を結成したのである。

昭和5年の初めに北区岩淵町稲村に引越した時、近所にいた童話仲間岩野高秋、山北清次、英鎮道らと「童話村」と称して子ども会などを行なっている。彼らは子供の人形座のメンバーであることから、きっかけはこの童話村の活動にあったのではないだろうか。

子供の人形座の「目的とするところはギニョール、操り、紙芝居、影絵芝居、遣ひ等あらゆるものを取り入れて子供のために動かさうと云ふのである」。²²⁾

その第一回公演は、日本童話協会の女人童話会が主催し、昭和7年1月24日（日）午後1時より小石川の伝通会館にて行なわれた。この公演の記録は「童話研究」第11巻第3号に詳しい。プログラムは

1. 鼠経（ギニョール）
2. おもちゃ芝居「貧乏神と怠け者」
3. 童話「子猿の話」 三輪寿雄
4. 舌切雀（ギニョール）
5. 孫悟空（ギニョール+マリオンネット）

で、定刻には満員（500人）となり、来賓としてロシア大使館のA・レーフェルト、小川未明、芦谷重常らが出席していた。

プログラム2番目のおもちゃ芝居というのは、内山が創案したもので、既製の玩具を使用して演じられるが、この日は深澤一郎がピアノ伴奏をして効果を上げたという。既製のおもちゃを使うという点では、今日のテーブル人形劇と通じるものがあるが、この公演では舞台で演

じられている。

また童話にも内田豊三郎のピアノ、舌切雀には足立蘆光の琵琶、そして孫悟空にはC・P・ストリオ(Children's Puppet Showの略か？楽器については不明)と、それぞれ伴奏がつき、照明もついていた。終了時間は午後4時半となり、3時間余りの大公演だった。

ギニョールの大きさは「童話研究」の口絵に載った写真²³⁾と、第一回公演の終了後に撮った記念写真²⁴⁾が参考になる。頭の大きさは、およそ鶏卵ぐらいか、やや大きめぐらい。聖美幼稚園に残されていた内山憲尚自作のギニョールをお借りして写真にしたが、記念写真に写っているギニョールとだいたい同じ大きさといえるだろう。

頭の大きさについて、彼は次のように書いている。「児童の人形芝居に於てはある程度までの誇張は必要とされなければならない。その程度は普通の2倍以下が適当なやうである。あまり大きく作りすぎるとグロテスクな感じになって滑稽になっていけない。」²⁵⁾



内山憲尚自作のギニョール
(大きさを示すための電池は単1)



子供の人形座 第一回公演記念写真
前列中央の幼児の後が内山憲尚、後列左端の和服が山田巖雄氏

舞台については「横二間、奥行七尺、高さ二間の舞台を新設し、指遣人形は立ち遣い同時にマリオネットが使用でき、影絵芝居がやれる組立式の大舞台を作成した」²⁶⁾とあった。舞台の間口については、「指遣人形劇の製作と演出」に「一間の大舞臺」²⁷⁾と書かれているのと、記念写真から判断しても、横一間高さ三尺ぐらいである。また同書には、「子供の人形座が現在使用してゐるものの舞臺の寸法は次の通りである。高さ一丈二尺 幅一丈三尺 舞臺の間口九尺 舞臺の高さ四尺 深さ四尺」²⁸⁾と記された文章もあるので、第一回公演後に作り直したのかも知れない。

内山は「第一回公演苦戦の跡を顧て」²⁹⁾という題の文を書いているが、その中に「林君の脚本検閲についての監視庁との往復」というのがあり、子どものための公演といえどもたいへんな時代であったことをしのばせる。

その後子供の人形座は、毎年春と秋の2回公演を目標に活動を続けた。ギニョールはもちろんマリオネット、影絵、棒遣い人形など子供の人形座の公演はバラエティーであった。昭和12年1月2日～7日名古屋松坂屋新年子ども会では「猿と蟹」を演じ、「一人遣ぬいぐるみ人形（平均二米）に遣手は黒衣で出遣い、大道具使用にて非常に好評を受けた」³⁰⁾という。

彼が上京した時からの古い友人で、童話仲間でもあり、子供の人形座の一員であった山田巖雄氏（明治34年生まれ、今年88歳）がお元気で活躍していることがわかり、平成元年9月21日港区の魚籃寺をたずねた。山田氏は、戦後魚籃幼稚園の園長となり、東京高等保育学校では「言語」を担当、さらに玉川学園女子短期大学でも「言語」と「児童文化」をご指導されていた。「童話研究」のコピーなど資料をお見せすると、「みんな故人になっちゃったなー」とおっしゃり、思い出すままに語って下さった。

名古屋に行った時には、「猿が内山先生で、蟹が僕、全部で5、6人だった。人形の大きさはこれくらい」と座卓の上に手をかざして下さったが、60cm程度であった。著書に二米と記してあったことを伝えると、「そんなに大きくはなかった。せいぜい大きくても1mぐらいでは……」と語った。出遣いで黒子を着て演じたが、人形が首をふると遣い手も人形と一緒に首を動かしたりして、人形と同じしぐさをしてしまった。それを見ていた名古屋の同人から指摘されて、その後は直したそうである。文楽を見てもわかる様に演技をするのは人形であって、

遣い手自身はせりふに合わせて演技はしないのである。

ギニョールは、立ち遣いで、せりふは遣い手が語った。人形はほとんど内山が製作し、衣装ははずれ夫人が縫っていた。「戦争中、物がなかった頃は、子どもさんの着物をみんな犠牲にしまってねえ」と言い、配給の足袋一足も人形の衣装に変えられたことを語った。

子供の人形座が公演をした伝通会館（戦災で焼失）は、2階建てぐらいのあまり大きくない建物で、当時は子ども会や音楽会、研究会などによく利用したところだったという。人形劇の練習は、明德幼稚園や聖美幼稚園でも行なったそうである。

やがて、子供の人形座のメンバーも若手が次々と招集されて戦死、また病死した仲間もあって昭和15年の第15回公演を最後に解散した。ただし、「日本口演童話史」では昭和18年に休演³¹⁾となっており、「日本児童演劇史」でも同18年4月に少国民演劇教室として「舌切雀」「因幡の白兎」を人形座が行なったことが記録されている³²⁾為、解散年についてはまだ明確ではない。

3. 東京人形劇研究所

子供の人形座結成の前年、昭和5年11月に設立された東京人形劇研究所については資料が少なく、彼の著書である「幼児と共に五十年」の中に簡単にまとめてあるだけなので、詳しいことは不明だが、かなり個人的なものであったと思われる。

研究所の所在地は、彼の自宅であった北区岩淵町で、聖美幼稚園の園長となってからは、品川区の聖美幼稚園内となった。設立旨意は「子どものための人形劇の研究普及啓蒙宣伝、指導。子供の人形座と提携して、その実際運動を援助、促進することを目的とす」となっている。後半部分の「子供の人形座と……」については、設立年度から考えても後から加えられたものと思う。

東京人形劇研究所のチラシが2枚、古本の間にはさまれていて偶然手に入れることができた。1枚は人形劇講習会の案内（申込書付）で、昭和8年9月16日（土）と17日（日）に神田・今川小学校で指遣人形劇と教育紙芝居を講習するというものである。対象は「小学校訓導、幼稚園託児所保母に限る」となっており、東京市教育局が後援している。講師は内山憲堂をはじめ、畠野奎三、藤原護郎、青柳義智代氏で、会費は七拾銭と印刷されている。

もう1枚は、「人形芝居の學校」（「日本で最初の」

と片書きがある)の案内で、やはり申込書付である。規約として下記のように記されていた。

- 一. 資格 普通部 小學校五年生以上の方なら男子でも女子でも入れます。中學校、女學校の生徒さんも歓迎します。
成人部 一般に人形劇に興味を有する方、幼稚園小學校日校等の教職員
- 二. 入學 月の始めから、いつでもよろしい。定員普通部三十名、成人部二十名。
- 三. 在學 一ヶ月以上何年間居られてもよろしい。
- 四. 開校 普通部 毎土曜日 午後一時から四時迄
成人部 毎金曜日 午後六時から八時半迄
- 五. 科目 指遣人形(ギニョール) 糸操り(マリオネット) 影繪芝居、紙芝居
- 六. 月謝 普通部 金五十銭 毎月五日までに納めて
成人部 金七十銭 下さい。
- 七. 申込 兩部共申し込みの時は申込書に入學金五十銭を添へて出して下さい。
- 八. 試演 一科目を二ヶ月以上納めた人は試演會に出ることが出来ます。
- 九. 加入 中等學校以上の卒業者で、一ヶ年以上在學した方は「子供の人形座」準同人となることが出来ます。

「職員及講師」として

所長	内山憲堂	教務	松浦龍鉸
講師	脚本・田郷虎雄	装置	畠野奎三
	照明・加藤 弘	音楽	勝間輝俊
	製作・藤原護朗	演技	青柳義智代
	演技・浅田嘉雄	演技	磯部慶包

となっており、いずれも子供の人形座のメンバーか、童話協会の仲間である。この2枚のチラシでは、東京人形劇研究所の場所は神田の中央仏教会館3階となっている。ここは子供の人形座の練習場所でもあった所だった。

以上の他に研究所が主催して、年に数回人形劇の講習会を開き、幼稚園・保育所の保姆を対象に普及活動を行なった。特に彼自身が開発したという「紙粘土」(人形の頭)のギニョール製作については、全国各地をまわり、その普及に勉めている。「指遣人形劇の製作と演出」に載っている紙粘土の作り方を簡単に示すと、まず新聞紙をできるだけ細かくちぎって鍋に入れ、こげつかない程度に水を入れて二、三時間煮る。それをすり鉢に入れてよくすり、「髪洗ひ粉(安いもので粘土が主なもの)」

とゴムのりか膠を入れて、手でよくねり合せて作る。この「髪洗ひ粉」が澤山入りすぎると重くなってしまうと記しているが、今日ではもう手に入らないので、どんなものだったのか解からない。

さらに「人形芝居の作り方」を二日間に渡ってラジオで放送したら、20~30枚の問い合わせがあったという。³³⁾

とにかく「一時は人形芝居にとり憑かれ、人形芝居狂人となり毎晩おそくまで人形の製作に凝り夜を徹することもあった」³⁴⁾という程、熱中していた時代があった。ただし、人形の衣装はすべて夫人のすずが縫っていたわけであった。

また内山は、昭和6年4月に日本大学の芸術学科に入學し、教授松原寛のもとで舞台芸術人形劇を学んでいる。

アメリカの学校教育における人形劇についても興味を持ち、ハワイにいた真宗の大関尚之の誘いもあって、昭和7年9月1日には日本を立ち、ハワイ・アメリカ・カナダへ渡って人形劇を見てまわった。さらに昭和10年には台湾へ、11年には中国に出かけて人形劇を研究し、収集活動も行なっている。

そして、聖美幼稚園を始めてからは、幼児の創造力を養うことを目的に、子ども自身に人形を作らせ演じさせた。1937年度版のアメリカの人形劇年鑑には、聖美幼稚園の子どもたちが演じている写真が紹介されたと述べている。

4. 出版活動

資料を拝借するため聖美幼稚園を訪ねた時、現園長の内山正憲氏(内山憲尚の三男)が、「とにかく書くことの好きな人でした」とおっしゃっておられたが、前にも記したとおり、生涯において100冊あまりの本を出版している。童話や人形劇の他、紙芝居、日曜学校や保育に関するものなど非常に幅が広い。

昭和2年に出版した「繪断と人形芝居」(法蔵館)は、お茶の水人形座の菊池ふじの・徳久孝子保姆が著した「幼児のための人形芝居脚本」(昭和5年・フレーベル館)よりも早く、内山自身も「おそらく子どものための人形劇の単行本としては初めてのものだろう」³⁵⁾と述べている。稀覯本、価値のある本を紹介した上笙一郎氏の「児童文化書々游々」³⁶⁾にも、この本が取り上げられた。

「日曜学校叢書」全十巻の第八巻目である「繪断と人形芝居」は、著者名が入っておらず、空襲をのがれた内山家にも、国会図書館、日比谷図書館をはじめ、東洋大学

・駒沢大学・鶴見大学など内山が関係した大学の図書館にも残念ながら残っていない。

また昭和8年出版の「指遣人形劇の演出と製作」は、日本大学時代の卒業論文「人形劇源流における宗教との関連」の「副産物に他ならない」と述べているが、この出版が大学に認められて「日大芸術賞」を受けている。³⁷⁾ 日大芸術賞は現在も存在し、すぐれた卒業論文・製作をつかった学生に与えられ、年度によっては該当者なしということもあるという。この本は昨年「児童文化叢書」（大空社）の1冊として復刻された。ただし、復刻された本は昭和12年に発行されたもので、昭和8年発行の本と中身も装丁も同じである。違う点は、復刻本の発売所が「家の教育社」となっているところ。児童文化叢書の解説で加藤暁子氏が「序文は昭和八年、発行は一二年、出版までに四年もかかっている」³⁸⁾と述べているが、昭和8年8月には1度出版されていたのである。

その他人形劇の著書は、昭和7年の「子供のための人形劇脚本」があり、戦後になって昭和24年に「一人で出来る人形劇脚本集」（片井商会）と「お話と人形芝居」（フレーベル館）、昭和30年に「人形劇と脚本」（白眉音楽出版社）がある。

さらに雑誌「童話研究」が、昭和7年の第1号と5号に人形劇特集号を組んだ時には、「東京における子供の為の人形芝居」という記事と「ギニョールの作り方」、脚本「お茶碗ぽっくりこ」（以上第1号）、脚本「孫悟空」（第5号）を掲載している。

以上のように、彼の著書は人形劇の理論から具体的な製作法にまでわたっており、出版活動を通しても普及に大きな役割を果たしたと言える。

おわりに

以上、内山憲尚の昭和初期における人形劇の活動について述べてきた。彼は倉橋惣三よりもやや遅れたものの、保育における人形劇の先駆者と言える。1個の中国製のギニョールに出会ったことから人形劇を始めたが、倉橋同様に彼も幼い頃から祖父の影響で人形芝居に親しんでいたのだった。

大学に在籍しながらも、日曜学校や日本童話協会の仕事を手伝い、保育にたずさわり、人形劇を取り入れて脚本を書き、自ら人形を製作していた。さらに童話仲間と「子供の人形座」を結成しての公演、東京人形劇研究所を設立しての講習会、人形劇に関する研究と出版活動な

ど、その意欲的で幅の広い活躍ぶりには、目を見張るものがあった。特に紙粘土を使ってのギニョール製作には、彼自身も熱中したが、その普及にも勉めている。確かに紙粘土を作るには時間がかかるが、卵の殻や空箱を使った人形とは違い、耐久性があって、子どもが少々手荒に扱ったとしても壊れる心配がないのである。ゆえに、この紙粘土のギニョールが、保育に人形劇を広めたとも言えるのではないだろうか。聖美幼稚園を始めてからは、保育者が演じて見せるだけでなく、子どもたちにも作らせ、演じさせたのであった。

倉橋と内山の活動を比較してみるならば、倉橋は「お茶の水人形座」と名付けたものの、人形劇を演じたのは幼稚園の中であり、保育に人形劇が広がるよう力を注いだのに対して、内山の場合は、保育の人形劇と、もう一方で一般の子どもを対象に人形劇の公演を行ったり、東京人形劇研究所の企画として人形芝居の学校を開いたり、新興人形劇運動の一端を担った活動をしたということに特色があるだろう。

昭和16年には大政翼賛会宣伝部人形劇委員会ができて、彼は委員となったとあるが、具体的な行動については記されていない。また川尻泰司氏の著書には「一時はアメリカ人形劇などの紹介をした内山憲堂（子供の人形座）なども参加せず」³⁹⁾とあり、不明である。

ここでは人形劇にしぼって彼の活躍ぶりを述べてきたが、内山憲尚はあらゆる児童文化のジャンルにも、保育界においても活躍した人である。山田巖雄氏は内山について「じっとしていることが嫌いな人で、出番を待つ控室にいても原稿を書いている姿を何べんも見た」と語る。そして、後輩から彼の本職は何かを問われた時には、「口も八丁、手も八丁と言うが、内山先生は口と手のほか、頭も八丁、努力も八丁、仕事も八丁、研究も八丁という人だよ」と答えたそうである。確かにそのとおりであった。

山田氏自身も浅草育ちで、花屋敷の人形芝居（桃太郎や西遊記など）を小学校に上がる前から何べんも見たそう、立絵や大道芸についても詳しい。山田氏にもまたゆっくりと話を聞かせていただかなければならないと思った。内山憲尚は旧友である山田氏の魚籃寺に眠っている。

そして、口演童話や人形劇の公演だ、研究会だと、外を飛び回る夫を支え、家事育児の他に聖美幼稚園の教諭として幼稚園を守り、またギニョールの衣装を縫ったり

と内山の活動を支えてきたすず夫人も、大きな役割を果たしたと言ふべきだろう。

次回は、山内勇仙と松葉重庸氏について検討の予定である。

尚、本文中、物故者の方につきましては敬称を略させていただきますこととお断りし、お詫びとしたい。

本研究にあたりまして、ご援助、ご指導いただきました本学の山内昭道教授に、またご協力いただきました聖美幼稚園々長の内山正憲氏、魚籃寺の山田巖雄氏に深く感謝の意を表します。

本研究の一部は、日本保育学会第42回大会において発表いたしました。

註

- 1) 齊藤尚子：東京家政大学研究紀要，29，63～69（1989）
- 2) 内山憲尚：幼児と共に五十年，日本童話協会出版部（東京），1975，p. 13
- 3) 同上，p. 61
- 4) 晩成書房（東京），1981，p. 159
- 5) 同上，p. 106
- 6) 註2) の文献 p. 62
- 7) 註4) の文献 pp. 107～110
- 8) 註2) の文献 p. 62
- 9) 同上，p. 19
- 10) 同上，p. 20
- 11) 内山憲尚編：日本口演童話史，博文社（東京），1972，p. 70
- 12) 復刻・童話研究，1，2号，89（1988）
- 13) p. 76
- 14) p. 44
- 15) 3，3号，74（1988）
- 16) 内山憲堂：指遣人形劇の製作と演出，日本童話協会出版部（東京），1932，p. 44
- 17) 内山憲尚編：保育を生かす幼児文化総解，博文社（東京），1964，p. 53
- 18) 文化書房（東京），1932
- 19) 内山憲尚：せいび40年，聖美幼稚園（東京），1965，p. 7
- 20) 註16) の文献 pp. 98～101
- 21) 内山憲堂：復刻・童話研究，11，3号，91（1988）
- 22) 同上，11，1号，32（1988）
- 23) 11，1号
- 24) 註16) の文献の口絵に掲載
- 25) 註16) の文献 p. 69
- 26) 註2) の文献 p. 64
- 27) p. 45
- 28) p. 82
- 29) 註21) の文献
- 30) 註2) の文献 p. 66
- 31) 註11) の文献 p. 71
- 32) 富田博之：日本児童演劇史，東京書籍（東京），1976，p. 262
- 33) 註16) の文献 p. 64
- 34) 註2) の文献 p. 70
- 35) 同上，p. 62
- 36) 上笙一郎：児童文化書々游々，出版ニュース社（東京），1988，pp. 250～252
- 37) 註2) の文献 p. 68
- 38) 上笙一郎，富田博之編：児童文化叢書 解説編，大空社（東京），pp. 233～239
- 39) 川尻泰司：日本人形劇発達史・考，晩成書房（東京），1986，p. 237